



専業主婦

研究機関研究員

大学教員・研究機関研究員

専業主婦14年からの研究生活再開

十川久美子 (東京工業大学生命理工学研究科生命情報専攻 准教授)

仕事の内容とやりがい

大学と研究所の2カ所の研究室を掛け持ちしながら、研究と教育を進めています。専門は、細胞内蛍光1分子イメージング。生きた細胞の中で、酵素などのタンパク質分子の動きを追いかけています。想像を超えたダイナミックな動きに圧倒されます。

仕事と家庭とのバランス

子供が小さいときは、子育てに専念し、研究を再開してからは、研究に専念(現在は単身赴任)と、極めてアンバランスな人生です。既に子供たちも独立していますが、研究に専念させてくれた家族に感謝しています。月に1回仙台の自宅に帰り、庭仕事をするのが、一番リラックスできる時になっています。

進路決定のきっかけ

研究者を目指して理学部に入学、大学院に進学しました。修士修了と共に結婚、就職。仕事を続けるつもりでしたが、出産後諸事情により断念しました。専業主婦として14年間、家事、育児、東京を経て仙台への転居、ボランティア活動などに熱中していました。40才の時、ふとしたきっかけで研究所の実験補助アルバイトの職を得ました。最初の仕事は、視覚研究材料のザリガニの餌やりでした。1年後、テクニカルスタッフとして常勤職に就きました。レーザー開発の研究室にあった光ピンセット装置に引きつけられました。上司にお願いして、DNA 1分子計測研究を始めました。工夫して実験系を作り上げるのがとても面白く、夢中でした。光ピンセットという新しい技術との出会いが研究者として再開するきっかけになったと思います。

進路選択に対するメッセージ

化学科に入学、大学院で生化学、再開後は生物物理学と研究分野を変えてきました。一度は断念した研究生活も再開できました。皆さんも進路選択で迷うことがあると思いますが、どの進路を選んでも、熱心であれば、道は開けていくと信じて進んでください。

海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

長期の留学経験はありませんが、2ヶ月間のオランダでの大学研究室滞在経験があります。大学院生との実験に明け暮れ、ディスカッションや研究発表などを通して、英語での生活に慣れることができました。下手な英語でも、コミュニケーションはできるという自信を得ました。

海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

2009年パリのキュリー研究所を訪問したとき、数人の女性研究者、大学院生とのディスカッションの機会がありました。女性研究者が半数を占め、研究グループのヘッドとしても大勢活躍なさっていて、日本との違いに驚きました。女子学生が半数近くを占めること、保育ママやベビーシッターを利用しやすい等、女性研究者が活躍しているバックグラウンドがあると思いました。

海外留学・勤務を決めたきっかけについて

テクニカルスタッフ時代に、進めていた研究がまとまり、ヨーロッパ生物物理学会で発表の機会を得ました。発表終了後、初対面のオランダTwente大学Greve教授から共同研究に来ないかとのお誘いを受けました。上司から許可を得た2ヶ月間、招聘していただきました。

滞在先の思い出・生活者としての体験

オランダ滞在中にワールドカップのフランス大会がありました。日本は苦戦していましたが、オランダは順調に勝ち進んでいました。教授の提案で、「サッカーテレビ観戦と日本料理」パーティをしました。30人分の手巻き寿司(サーモン)、鶏の唐揚げは、準備が大変でしたが、楽しい思い出になりました。

<十川久美子(そがわくみこ)プロフィール>

- 1970年 大阪府立大手前高等学校卒業
- 1974年 大阪大学理学部化学科卒業
- 1976年 大阪大学大学院理学研究科生物化学専攻(修士課程)修了、結婚、
- 1976年 名古屋市立大学医学部生化学教室研究員
- 1978-1992年 専業主婦(1978年第1子出産、1981年第2子出産)
- 1993年 理化学研究所フォトダイナミクス研究センター テクニカルスタッフ
- 1999年 国立遺伝学研究所構造遺伝学研究センター 研究員、助手
- 2000年 博士(情報科学)取得 (東北大学)
- 2003年 理化学研究所免疫・アレルギー科学総合研究センター 研究員
- 2007年 同ユニットリーダー
- 2010年 現職(理研ユニットリーダーを兼務)

